
希代の名演者

長崎秋緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

希代の名演者

【Nコード】

N6805E

【作者名】

長崎秋緒

【あらすじ】

二十歳になったばかりのわたしは、初めての大人の男性の虜になっていく。

前編

同じ派遣会社で働く年上の彼に誘われ、初めての遠出をした帰り道。県を一つまたいだ長距離の運転にもかかわらず、彼はとても静かに車を走らせている。

入社した時期が近かったこともあって、岡田さんがわたしの一番近しい男性になった。女の先輩連中には目をつけられぬようにと、できるだけ岡田さんとは距離を置くつもりでいたのだけど、他の女など目に入らないよ、と彼は社内の人間関係などお構いなしにわたしにだけ、あからさまなアプローチをしてきた。

先輩連中の数人は、おそらく岡田さん目当てだったらしく、古くから居る先輩方に目もくれず、後から来たわたしにだけ、その積極性を向ける彼を妬みの矛先にはせずに、女性特有の、同棲に向かう嫉妬心から、少しずつわたしの陰口が聞かれるようになっていた。

親切心からわたしにうわさばなしを聞かせ、気をつけなさいと忠告めいたことを言うてくれる先輩もいたけど、わたしはもう岡田さんの、まるでイタリアの伊達男ばりの色香にまいつてしまっていたので、周りの陰口なんかは耳の奥がつまったみたいに、わたしのところにまでは届いてはこなかった。

ベッドの中でも岡田さんの伊達男ぶりは、まだわたしの体の芯を火照らしつづけ、助手席に座るわたしはまだ緊張と昂奮から冷め切らず、岡田さんの優しいタッチでわたしの体のすみずみを撫で回し、その眩惑からは逃れられなくなったほど、その行為は素敵なものになった。

あの、手取り足取りわたしを人形のように扱いながらも、女性としての自尊心にも配慮した彼は、女の扱いに手馴れていることが容易に想像できた。彼に抱かれた他の女性達もきっとそれだけは今も大切な思い出にしていることだろう。

深夜の国道は粗い運転が目立ち、バイクも乗用車もすぎ放題スピ

ードを上げては車線変更も、ウインカーもおかまいなしで、右へ左へと車線を移し、何に急かされているのか、しきりに少しでも前へ前へと進もうと必死になっていた。

信号待ちが一つでもあれば、岡田さんの車はすぐに彼らに追いつき、また岡田さんから逃げるように立ち上がりにエンジンを噴かせ走り去っていく車達にわたしは不快感を覚えてしまう。

わたしは運転のマナーの悪い人が嫌いだった。特に後ろから煽ってくるドライバーは軽蔑の対象とされていた。それだけに、岡田さんの模範的な運転には全幅の信頼を寄せることができていた。

彼なら、不注意の事故なんて起こしはしないだろうから、わたしがこのまま助手席で眠りについてとしても、彼はわたしに気づかないくらいに優しくブレーキを踏み、停止していたことすら気づかせない運転技術に長けているのだと思った。現に他人の運転では酔いやすいわたしが、ここまでこれだけの安心を得られていたことが驚きだった。

「今日はいろいろ行ったら疲れたでしょ。いいよ寝ていても、着いたら起こしてあげるから」

「でも、それじゃあ岡田さんが退屈で眠くなったりしない？ わたしはまだ眠くはないから気を使わなくてもいいわよ」

「それじゃあ、ぼくが眠くならないように、何か話してよ。未久ちゃんのことを」

その時のわたしは顔を真っ赤にさせていたように思う。でも車内の薄暗さがわたしの表情を岡田さんに読み取らせないでくれたから、そういう会話は慣れてますよ、と氣勢を張り、わたしは少ない恋愛経験の、浅はかだった頃のことを話し出した。

岡田さんは前方に視線をやったまま、わたしの断片的に思いつくままのおしゃべりにひとつひとつあいづちをうつてくれ、ツーストロークの会話でわたしより口数が増えた彼に余計気を使わせてしまった自分を咎める思いも有りはしたけど、わたしの下手な思い出話の言い終わりを見事に捕まえ、その断片を彼独特の感性から紡がれ

る二段構えの『返し』が楽しい会話へと広げてくれる。

岡田さんは会話の読みが抜群にうまくて、傍にまわり、他人として見れば、わたし達の会話が如何に弾んで映って見えることだろう。

でも、岡田さんからは本当に恋人同士になった今でも、どうしても壁一枚隔てた精神の防壁が、彼の内側の者になってから、よりありありと感じられていた。どこことなく、これといった根拠もなかったが、ありていにいうと、女の直感の類がわたしに、その人は安全ではないと告げているようだった。

また後方にライトが見え、ミラー越しに眩しいブルーの前照灯が、運転者の自己顕示欲をまんま表すようにしてわたし達の背に当ててくる。

だんだんと、後方の軽自動車との距離が詰まってきて、岡田さんとの車間距離の安全圏も越え、ほとんど煽りの体勢に入り、ぴたりと後部に張りつき、急かすように距離を空けようはしなかった。

わたしは腹立つ思いで後方の車を意識していたけど、岡田さんはウインカーを左にだし、ゆっくりと速度を落とし歩道に移行していく。

後方の高級車に乗っていたのが、すれ違いざまにガラスの悪そうないかにもな若者だと分かると、わたしの怒りはさらにおさまりがきかなくなる。

よく冷静に譲ることができるものだなと、岡田さんの大人な態度が頼りがいのある年上の男性を強調するかのようで、わたしのお熱は益々岡田さん一筋にならざるを得なくなってきた。

「ひどいですね、あの車。わざわざあんなに煽らなくてもいいのに」「運転中は腹の立つことはよくあるからね。しかたないよ。人の意識はそれぞれなんだから。煽られたからといって、こちらまでスピードをあげちゃったら、ぼくらまで危険な目に遭う確率が上がったやうでしょ。だからあくまで、そういった他人の迷惑には流されず、ぼくらの立ち位置は変えることなく、あくまで安全運転で行こうよ。早く帰りついたら、未久ちゃんとうしてドライブしている時間が

それだけ短くなるんだから、ぼくとしてはそんなに急ぎたくないんだ。今日の楽しかった余韻を感じながら、君を助手席に置いて少しでも一緒に居たいんだ」

よくそんな恥ずかしい言葉を堂々と言えるものね。そう内心冷やかしながらも、わたしは照れ笑いでなんとかやりすごす。

もちろん、悪い気がするどころか彼への想いはより強固なものへとなっていくばかりで、わたしのお熱は上限を未だ知らず上昇しっぱなしだった。

わたしのことを、恋愛ドラマのヒロインに押し上げてくれる岡田さんの演技性の言動は女性の感性の劇場型であるところをよく理解していた。

そうやっていままでの女性達も口説きおとし、彼に自ら心酔させるよう岡田さんは、わたしのような恋愛経験の浅い女性を手玉にとってきたのだろう。

さきほどから後方車の列が増えてきていた。もう深夜にさしかかろうとする時間帯に不釣り合いな車の列が確認できると、さすがにいちいち道を譲ってはいては帰りが明け方になりかねないわね、ここらへんで、岡田さんの模範的なドライバー像も一旦崩してはどうかしら。

そうわたしは考えていたが、思惑に反し岡田さんは先を急ぐ車には寛容で、左へウィンカーを出し、その度に一時停止を繰り返す。

わたしはいい加減じれてきていたけど、岡田さんの決して自分のルールを破ろうとしない断固な信念は男らしさとも見間違えることのできるのは、わたしの理想に在る男性像が岡田さんそっくりだからだった。

また、岡田さんの後ろで車間距離を無理に詰めてくる車があった。彼は涼しい顔で、問題ないとばかりに車線を譲る。

「そんなに他のドライバーに気を使わなくなっちゃって、岡田さんの車だったらもつとスピードだせるでしょうに」

岡田さんは前を向いたまま、にこりと微笑み、「車の価値を本当

に決定付けるのはドライバーなんだよ。どんなに高級車に乗っていても、窓から、たばこの灰を落としたり、強引な割り込みをしてきたり、また必要以上に速度を上げたり、速度メーターは限界まで上げていいですよ、といったっているんじゃない。どんなに最高速度の出るスポーツカーに乗っていたって、一般車道で最高速度を出すのは車の品位や誇りを汚すことになるんだよ。車の価値を決めるのはぼくらドライバーなんだから、これは負け惜しみではなくてね、実際にぼくだってBMWのオーナーになれるだけの個人資産はあるんだよ。でもぼくにとって、国産の高級車や、ベンツなんかはとても下品な車なんだ。日本人の場合、特に成金がすぐに手をだすありきたりなサクセスストーリーのインテリアには興味がないんだ。それにぼくはこの車が気に入っているから。みてよこれだけの居住空間を維持する日本車を生産できる技術者の高度な能力は感動の域だよ。1500ccの排気量でさらに排出ガスをおさえる技術。日本人は技術者を軽く見すぎだと思っただ。あ、こんな話つまんないよね」

得意分野になると饒舌になる男の人の、自らの持てる限りの知識を女性の前で披露したがる、男性としての顕示欲は、好きな人であればときめきの対象となるものなのだと、改めて恋は盲目という格言めいた古い文句の鮮やかだった頃の心覚えがあつた過去を思い返した。

岡田さんの迷いを捨てた思想にすっかり引き込まれ、彼の言葉を鵜呑みにしても、たとえそれで不幸に遭おうが、きつと幸せな気分が地獄へも落ちていかれる、狂気の見込みは消えず、わたしは体も許したその人に、文字通り身も心も与え、破滅的な快樂への道案内を彼に求めたいと思った。

「未久ちゃん、今変なこと思い出してなかった？　ぼくの話聴いてくれてたのかな」

わたしは問いかけに答える余裕などなかった。本性を見透かされた戸惑いと、岡田さんにはもうわたしの心まで明け渡していたことを、わたし自身が気づいていなかった至らなさを、全てを預けては

いなかったはずの、わたしの深部に彼はいつの間にか堂々と上がり込んで来ていたことの驚きに感心しきっていた。

彼にはわたしの恥ずかしいところを何もかも見せてしまったつもりだったのに、岡田さんは裸にしたわたしをもっと辱めるように心まです裸にひんむいて、それに気づきもしないわたしの愚かさを感じていたに違いない。

数時間前の、岡田さんのわたしを弄ぶ行為の手馴れた具合から、この人ならそれくらいイジワルはやりそうだと窺い知れていた。

わたしは彼の焦らし作戦にまんまと嵌り、いやらしい女の本性が剥がれ落ちていく様をわたしに鏡面をつきつける、非道德的なやりかたで、わたしに翻弄されることの快感を教え込む企みらしい。

なんて色気違いな人。わたしのなんでも知っていたのかしら。そうしてわたしの良いところも悪いところも全て引き出して、人間である一番の証をわたしに捨てさせ、本能の限りに色情狂を育てようとしているのね。

わたしは岡田さんに着いて行く覚悟を決めていたから、たとえ初めての相手というハンデがわたしの正しい判断を鈍らせていたとしても、むちゃくちゃにしてほしかった。

あの快感をいつでも彼がくれるというのなら、そんな破局でも受け入れられる気がしていた。

真面目で御堅い女性像で塗り固められた思春期に巣食いはじめていたものが、今はつきりとしだいにその姿を現していくのを身の内に疼きとなり体感し、おへその下あたりがきゅんきゅんざわめき振動となり、わたしが不道德な女であることを伝えてくる。

今の時代に貞淑なんて無用だわ。ちよっと裕福な家庭に生まれたせいで、わたしは人並みに恋愛もさせてもらえず、つねに嘘の淑女を演じてきた。だからこそわたしも打算があつて岡田さんと対決してやろうという気になったのだ。

それなのに、彼はわたしなどが到底及ばないくらいの役者ぶりで、会社で見せていたあの誠実な男性を演じ、まわりに本物だと信じ込

ませていた。

現存する名役者と謳われる者達を分け入って、突如踊り出てきた希代の名俳優よろしく、ミ―ハーなファンのわたしをあつという間に虜にってしまった。彼こそ役者だと推し量り、わたしのは単なるまねごとでしかないのだと痛感させられた。彼は生まれつきの女たらしだ。きっと本人は演技している自分にすら無関心なのだろう。

彼は女を良いようにつくりかえるのが趣味な、変態的資質の持ち主で、彼にとってはわたしもその嗜好を充たすためのお人形さん程度なのだ。

こんなひどい男を思いつきり嘲笑って捨てることができたなら、わたしは男たらしになれる素質のあることが分かるはずだ。女の敵である彼なんてわたしが退治してやらなければ、ほかの女性が被害に遭わぬ様一生わたしの手もとにおいて、彼が他の女性達を傷つけることがないよう監視しておかなければ。わたしは世の女性の為に自らの心身を投げ出し、悪魔のような彼の生け贄に名乗り出た、儚くもいじらしい少女を演じよう。わたしは、わたしの命を賭け、この誓いを貫いて生きていこう。

彼の、横顔の輪郭がとても鋭角的で、本当にイタリアの伊達男じみてきた。一重の切れ長の眼も、筋の通った鼻から下にあるへの字型の唇も、全てがわたしを魅了する対象であるかのように、彼がたとえ一瞬の気の緩みで顔を崩したとしても、それさえも愛へと変換されそうで、わたしは惹かれていく自分を止めることができなくて怖くてしょうがない。

でも逆らえない。彼が殺人者であつたとしたら、わたしは喜んで共犯者になってあげたい。でもそんなことはさせない。わたしが全力で彼に尽くしてやり、彼の欲情を全て充たしてあげ色情魔にとりつかれた彼を救い出してみせる。わたしの心も体も彼の果てしない情欲の受け皿となってあげよう。

「最近対向車のライトがまぶしくって困るよ。ハロゲンの倍もある

っていうやつ、なんて言うんだったかな……」

岡田さんは対向車のある度に、顔をしかめ、視界を保とうとしていた。

「眩惑したら危ないからね、一人なら事故起こして死んだって構わないんだけど、未久ちゃんを乗せてるからそうもいかない」

「わたし、岡田さんとなら心中したって後悔しません」

幼子を見つめる大人の優しさの、岡田さんの眼差しがわたしに安らぎを与えてくれる。

「だれも心中なんて求めてないよ。せつかく未久ちゃんと愛しあえたんだから、生きていきたいよ。ずっと」

「わたし、精一杯岡田さんの理想に近づきますから」

「そのままの君が、たくさんの女性の中で、ぼくの心をただひとり釘付けにしたんだよ。」

手ほどこならぼくがしてあげるから、未久はぼくに身を任せてくれればいいよ。精神的な安らぎとかは、本人のその時の感情にも左右されるから、絶対の、とは言い切れないけど、経済的な安定なら君にあげられるよ。今は派遣でやってるけど、ぼくにとっては場つなぎ程度で、今度ちゃんとしたところに就職するつもりだから、その当てもあるんだ。大学時代の友人が口を利いてくれる手筈もすでにできてるんだ。精神の安定って大抵は経済力で何とかなるもんだから、お金があるってことは精神的にも楽になれることが多くなるんだよ。ぼくはいい加減で、適当なことは言いたくないんだ。だから、こんな頼りない言葉でしか気持ちを伝えられないんだ。だって、心の底から愛してる人に嘘なんかつきたくないから……」

運転中の岡田さんが申し訳なさそうに語尾を濁した。そうじゃないんです。わたしはあなたに安定なんて求めてはいないんです。わたしはあなたの尋常を超えた言動に心奪われているのだから、そんな心配いりません。あなたは不逞の限りを尽くしてくれたらいいんです。

信号待ちで、岡田さんが唇を求めてきた。わたしはされるがまま

に、口内に舌を挿し込まれ、信号待ちの短い時間では物足りない
次の信号が赤で、願わくばできるだけ長く足止めをしてほしいと、
彼の舌を思慕してやまなかった。

後編

わたしの熱っぽさを配慮してか、岡田さんは、コンビニの駐車場へハンドルを切り、飲み物を買っていくことを提案し、わたしの返事もまだのうちから、喉が渴いているものだと言いつけた。

休憩中の長距離トラックや、わたし達のように遊び帰りの恋人、やんちゃな男の子達、さまざまに人々の大小形もそれぞれ異なる車を休ませている。

車のおりしなに、もう一度岡田さんの求めるままに口の中に彼の舌が這い回り、わたしは胸襟を開かされたままの恥ずかしさを抱えたまま、彼が手をとって導くままに店内の、他のお客さん達の好奇の目に晒され、それでもどこか嬉しさの隠し切れない、優越感めいたものも感受していた。

わたしがカフェオレを手にとると、

「カフェオレとカフェラテの違いって分かる、未久？」

ぼくは水がいい、口の中に味が残る感覚が嫌いなんだよ。そういつてわたしがまだ答えないうちから、カフェオレはフランス語で、コーヒー・ミルクって言ったらいいのかな、ラテのほうがイタリアで、エスプレッソにスチームドミルクを加えて作るものなんだよ、と講釈をしてくれた。

それを聞いていたドリンクコーナーの背にあたる、食品とパンの並びコーナーでうるさくさわぎ物色をしていた、二十歳そこそこくらいに見える男の子達が、わたし達の方を振り返り、そのうちの一人が、「うわ、きもちわりい、気どりすぎだろ、おっさん」

岡田さんは、彼らの方を見ようとせず、わたしの手からカフェオレを掴み、自分のペットボトルを両手に持って、会計へ向かう。

わたしはその態度は、その手の連中の感情を逆なでする行為だと、岡田さんが、男の子達になにか乱暴でもされやしないか不安になり、早く会計を済ませさっさと岡田さんのパールホワイトの普通車にあ

る、わたしだけの助手席に乗り込んでしまいたかった。

わたしの心配は徒労に終わり、無事会計を済ませ、再び深夜の車内へと戻り、岡田さんのパールホワイトの車体が煌々と輝きを放ち走り出した。

「父が言ってたんですけど、パールホワイトって、水垢が目立って、縦に線が入ったようになることが多いんでしょう？」

「未久ちゃんは鋭いな。確かにそうなんだけど、車の汚れは雨水が乾燥して線になるから、雨天の走行後は軽くタオルで拭いてやるだけでもずいぶんと汚れの目立ちが違ってくるんだよ」

「タオルでガラス面を拭いちゃったら傷になりはしないかしら」

岡田さんは少しいらついたらしく、しばらく車内に沈黙があり、
「未久ちゃん、疲れただろう。シートを倒して休みなよ」と命令するような男の肉声で、わたしに目をつむるよう促す。

その声には、抜き身の真剣みたいで、ざらりと光る寒々とした近寄りかたさがあって、きつと逆らったらわたしは彼に言葉の論理で大上段から切り殺されてしまうのだと思い、岡田さんはできればそうしたくないから、わたしにあえて厳しい言い方をしたのだと、それさえも彼の思いやりから生まれたものに決め、言われるままシートを倒し閉じた瞼に力を入れ、無理矢理にでも眠りにつこうと努めた。

静音性の高い車内でも、風を切る音や、エンジン音、タイヤのロードノイズ、いくらでもわたしの眠りを妨げるものは存在するが、そんな雑音よりも彼の言葉の恐ろしいまでの響きの方が、よっぽどわたしの脳内を駆け回り、落ち着かせてはくれなかったもので、わたしは寝たふりを決め込み、ただ車体にぶつかる風の音が、人の声を真似ているみたいに、時々叫び声や呻く声に聞き違えて伝わってくるのが、それも岡田さんのしわざなのではないかという邪推さえしてしまう。

風を切る音に混在し、別の呟きが聴こえてくる。岡田さんがなに

か言っていた。

舌打ちして、ぶつぶつ呟き、ハンドルに指先を小刻みで苛立ちのリズムをとっていた。

わたしは岡田さんに気づかれないように、薄く瞼を開き、バックミラー越しにあの男の子達の乗っていた国産の高級車が、岡田さんの車を煽っているのだと知れ、このまま岡田さんの言いつけを破り、目を開けていいものか迷っていた。わたしが起きたところでないか手助けが出来るわけでもなく、岡田さんのことから、また何でもないように道を譲ってあげるものだと考え、もうしばらくは寝たふりを続けることにした。

アクセルを急に踏み込んだ時の、エンジンのうなりで、彼が加速したことが分かった。

意外なことに岡田さんは、道を譲ることをせず後から迫り来る男の子達と張り合うつもりの方だった。

スピードがぐんと上がり、風のぶつかる音が激しさを増していた。薄目でサイドミラーを除くと男の子達も加速し、彼と競い合う構えらしく、わたしは怖くってただ薄目を止めず、視線の先を岡田さんへ移した。

彼の横顔がさっきまでとは違い、明らかに血の気の多くなっていることにわたしは思わず声を上げ叫びそうになった。

目を力強く見開き、黒目の輝きが尋常ではなく、狂気の中に艶っぽさを孕んで、わたしはその恐怖に身が縮む思いを感じつつ、その艶っぽさに魅せられてしまった。

長い直線に入り、一気に岡田さんはアクセルを踏み込んだ。遅れて後ろの車も加速する。

岡田さんは本性を抑えきれなくなり、口元をひくひくさせ、口角でこれから起こることに對する嬉しさを漏らして、

「未久ちゃん、見ててよ。起きてるんだろ」

はっと目を開け、岡田さんを見つめ、メーターにも目を配らせる。100キロを越えていた。直線の半分を過ぎたあたりで、左にウイ

ンカーを出す。速度はそのままだ。

左にハンドルを切り、車線から外れ、後ろの男の子達の車は、さらに加速をつけ岡田さんの車を抜き去った。横切る際に助手席の男の子が馬鹿にした笑い顔をしていたように見え、わたしは悔しさからどうして急に勝負を降りてしまったのか問い詰めてやりたくなかったが、岡田さんはますます黒目を大きくさせ、前方の車を指し、「今からあいつら事故るからよく見てて」

次の瞬間、直線が終わり、左へのカーブでわたし達の視界から消えていったはずの車体が、サイコ口を乱暴に転がしたような角ばった回転で、大きく跳ね上がり、ついで深夜の静寂をぶち破る怒号のブレーキ音とアスファルトを転がる車の重たい衝突音がわたしの鼓膜を破りそうなくらい近くに聴こえてきた。

車道から、歩道に移り速度を今はさっきの半分以下で徐行していた岡田さんは、

「あそこの先のカーブに一軒家があつてね、よく、特に週末とおわりにかけて、おそらく知人でも訪ねて泊まっているんだろうけど、歩道ぎりぎりにバンを停めてるんだよ」

わたしの体内に冷めた血が流れているようで、めまいが起り運転席の岡田さんは、わたしから精気を奪ったかのように目を輝かせ、早く転がった車を拝見したそうに、でも速度を規定の範囲内におさめカーブの手前の民家の脇に車を停めた。

すでに民家には明かりがついていて、住人が五、六人でできていた。岡田さんは臆面もなく住人に近づいていつて、「事故ですか？　すごい音がしましたね、車の運転者はどうなったんですか？」

住人の、おそらく家主だろう不精髭を生やした男が、お酒で赤らめた顔で、自分達もなにがどうなったのかわからない、おおきな音がしたから飛び起きてきたただけだと言いつつ放った。

岡田さんは落ち着いて、まず救急車と警察に電話をしてください。ぼくは負傷者を見て来ますから、いいですか、電話番号は分かりますか？　そうです。こんな時だからこそ慌てちゃだめですからね、

と現場をしきる警官のような口ぶり、家主に命令し、家主のそばでおろおろと落ち着かない足取りで家と歩道に停めてあるバンとの間をいったりきたりしている背の高い、しかしおどおどとした物腰の男を見つけ、岡田さんは彼のもとへ小走りにかけていった。わたしも後について走り出した。なにか岡田さんの近くにいなければいけないような気がしていたし、いつわたしにも命令が下るか分からないから彼の助手みたいにいようと考えた。

「大丈夫ですよ。あなたのせいじゃないですよ」唐突に背の高い男に話しかけ、このバンはあなたのものでしょう、と訊ねた。男は猫背をさらに曲げ、すいませんとなぜか岡田さんに謝っていた。

「ぼくらは後ろから見ていたんですけど、あの車は、そうですね、こっちの車をあつという間に追い越していきましたから、相当スピードがでていましたね。普通じゃなかったですよ。それでこの急カーブを曲がり切れなくて横転したのでしょうか。おそらく若いドライバーにありがちな過信ですよ。もし警察の人に尋ねられたらぼくはそう答えるつもりです。でも、あなたの車をこのままにしておくとか都合の悪いことも起こるでしょうから、どうですか、今のうちに車をその車庫ぎりぎりに入れては。ぼくの見た限り車庫の中の車をもっと奥にやれば、なんとかあなたの車も入り込めそうですから」

迷いの思考に落ち込み、自らでは決断のつかないその男に突如現れた救世主のような岡田さんの一声で、驚くことに男は迷いを断ち切った人の、清々しい表情になり、ありがとうございますと、耳を疑うようなことまで言い、さっそく車の移動にとりかかる。

その間、わたしは岡田さんの後につき、反対車線に横転している国産高級車のもったいないほどひどい損傷具合に、さきほどの怒りを忘れ、救いの手を差し伸べてあげたい気持ちになっていた。

怖くって車には近づけないわたしを岡田さんは少し離れて待っているようにと指示し、自分は壊れたドアを覗き込み、大丈夫かと声をかけ生存の確認をする。

痛ましいいうめき声の応答に、岡田さんは三人のうちの運転席側の

負傷者を引っ張り出し、歩道に寝かせる。暗がりでも額からおびただしい出血が分かった。後部座席の男も同じように車外へ出してあげ、しっかりしろと声をかけている。

車の反対側に周り助手席の男を抱え、三人を川の字に寝かせたころには岡田さんの額には薄暗がりのなかでも認められるほど多分に汗を滲ませていた。

わたしは岡田さんの車に戻り、バックの中から小さいタオルを手にし、さっきとはうって変わった献身的な態度になった彼の汗を拭いてあげようと急いで戻ってきた。

岡田さんはわたしのタオルを受け取り、感謝の言葉の代わりに、わたしの額に軽くキスをし、顔を滴る汗を拭いながら、「この車高いんだよな。まず新車なわけではないから、中古としてもこいつらじやどうせローンだろ。むりして高いやつ買ったのにこれじゃもう廃車にするしかないだろうな」

三人の口元に顔を近づけ、岡田さんは花の匂いを嗅ぐ時の手つきで彼らの息を確かめた。

「酒気帯びじゃあないらしい。それだったらもつとよかったのに……」

岡田さんは心底楽しそうな顔つきで、この大変な状況を喜ばしく受け入れているようだった。どういったらいいのかわたしは頭の中がぐるぐる廻り、彼は確かにこの状況を望み直線で加速し、今は、苦しそうに呼吸をする男の子達を惨事へと巧く誘導することに成功し満足しているようだった。

岡田さんの底知れぬ計略の精妙さに、きつと犯罪者に出くわした時は今のわたしのような、芯まで伝わる寒気を覚えるに違いない。そう畏怖の心境に至り、彼の全身が刃物で出来ているようなきわどさと冷血さに、まるで対向車の前照灯に直撃を受けた眼球のような眩惑に、思考が完全に停止し、何も見えなくなった人のような頼りなさに、過剰な不安感が襲い掛かってきた。

三人のうち比較的損傷の少なく見える、流血のわずかな男の子が、

喉を人差し指と親指で摘むしぐさをしてみせた。とたんに岡田さんが堪えきれないとばかりに大声で笑いだした。

「見てよ、こいつあんな無謀な運転してたくせにこんなことは知ってるのな。お笑いだね。『窒息のサイン』をするなんて。じゃあ、ぼくは『腹部突き上げ法』でもやってあげればいいのかな」

彼の饒舌は増し、目下に横たわる血まみれの負傷者に聴こえるほど大きな声で笑うのを止めない。

事故に遭い、気道が詰まり息がでなくなった際の世界共通のサインなんだと教えてくれ、その際に気道を確保するための一般的な方法が、腹部突き上げ法なのだと、負傷者を使い実演してくれた。片手の拳を握りそれをみぞおちの下にあて、もう片方の手で、拳を握った方の手首を掴み背後から上へ突き上げるように持ち上げる。数回繰り返すうちに男の子の口から嘔吐物が吐き出された。

それが済むと今度はタイヤのブレーキ痕に興味が湧いたらしく、まだ警察も来ないうちから、ひとり現場検証を行うよう、アスファルトについたそれをかがみ込んで、「これはどのくらいのスピードでつくれるものなのだろうか……」と呟いた。

まず救急車が駆けつけてきて、救急隊員の人々が岡田さんの応急処置の見事さを褒め、謙遜し彼は、ますます救助隊の好感を得ていた。つづいてパトカーが到着し、派出所の警官が現れると、岡田さんはすぐに近づいていって、ぼくが事故の目撃者です、と名乗り出た。警官は岡田さんの的確で、分かりやすい、でも彼らの職務に口を挟むことは言わず、ただ状況だけを客観的に話して聞かせていた。

彼の誠実さに警官は感銘を受け、民家の住人もいるのに、岡田さんだけに事情聴取の時間を割いて、警官はまるつきり彼の言葉を信用しきっているようで、いちいち彼の言うことにうん、うん、免許取り立ての若い連中にはよくあることだと、負傷者を非難することまで言い出す始末だった。

警官に雄弁に語る彼の眼光はもう恍惚さを隠しきれないほど輝きの最高潮にあって、演技性の彼の本領を発揮させ、教祖様の言葉に

こころ奪われ、だらしくひたすらに、頷くばかりで、いったいどちらが警官なのだろうかと見間違えるほど、岡田さんの方が堂々とした態度で警官と対峙していた。

思い出したように、彼は、彼の背にしっかりとくっついて離れようとしないわたしに、

「未久ちゃんは今車の中で休んでなさい。警察の人には事故を目撃したショックで疲れきっているっていっておいたからね」

彼が汗ばんだ手で車の鍵を渡し、

「暑かったらエアコンかけてもいいから、横になって今度こそちゃんと休むんだよ」

それだけ言って、また警官の聴取を一手に引き受けている。岡田さんの目つきは狂人の時々放つ、異常をきたした人そのもので、常人には決して漂わせることができない恐怖を越えた妖艶な甘美の鋭く人を射すくめる、狂人達の頂点に立つ資格のある、絶対者のごとくわたしは彼が誇らしげに警官に詳細を語る、その後姿に、決してわたしはこの人からは逃れることはできそうもないほど恋着している自分の心理が、彼と同様に平常をはるかに逸脱し異常をきたしているのを感じずにはいられなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6805e/>

希代の名演者

2010年10月8日15時10分発行